

「Osseointegrated implant 27 年間の推移と現状

(多数歯欠損症におけるインプラント上部構造選択のガイドライン&低侵襲性インプラント治療の実践)」

寺西邦彦

私が Osseointegrated implant の臨床応用を開始したのは、1988 年で、27 年前になる。

そして、東京 SJCD において初めて Osseointegrated implant をテーマに例会を行ったのは 1990 年ころで、その時の基調講演が小宮山弥太郎先生で会員発表を私が担当したのを記憶している。当時 Osseointegrated implant はまだ一般的な治療法ではなかったためか、多くの方から長期性はあるのか？トラブルはないのか？等、多くの質問を受けたような気がする。その後、多くのインプラントシステムにおいて更なる開発が行われ現在に至るが、現代においてはグローバルスタンダードにおいて、Osseointegrated implant は欠損補綴の治療オプションの第一選択となってきているといっても過言ではないだろう。

昨今、日本においてはインプラント治療におけるネガティブキャンペーン等があり、インプラント治療が減少しているとも聞くが、現実には多くの患者が安心そして安全なインプラント治療を望んでいることは疑いのない事実である。さらには、インプラント埋入不可能部位への対応、そして良好な審美性の獲得のための、骨造成等の外科手術が増加してきているようである。これら相反するニーズに答えるのは容易なことではないが、臨床医として可能な限り患者ニーズには答えたいと思っている。

そこで今回は、「Osseointegrated implant 27 年間の推移と現状 (多数歯欠損症におけるインプラント上部構造選択のガイドライン&低侵襲性インプラント治療の実践)」といったテーマで、長期経過例における力学的トラブルそして最近のトピックである Peri-implantitis に対する対応等に関して、Photofunctionalization をも含めて私見を述べさせていただきたいと思う。